

笑顔

奥田 愛矢

「何故障がいを差別する人がいるのだろう」

僕は小さい頃からずっとそう思い続けてきた。インターネットでは障がい者の方々についてあまり良くかかれていないし、何より仕事の待遇だって決して良いとは言えない。今の日本の風潮では少なからず、障がい者と健常者一のように差別化する考え方が根づいていると思う。僕はこの点が心底残念であった。とは言えども、自分自身が一度も区別せずに生きてきたかと問われるとそれは「はい」とは言えない。実際に、実生活において行動することは確かに難しいと思う。しかしその今までの自分の考え方を大きく変えてくれたのがある出来事であった。

突然だが、僕の父は障がいを持っている。と言っても体が動かないとかでは無く、精神の障がいだ。人からはよく「精神障害者」と言われており、これは別名「うつ病」である。父は僕が中学校に入った時ぐらいからか、このうつ病を発症した。それまで、優しく接してくれた父が気が狂ったように暴れだした。また人目を盗んで自殺を謀ろうとしたこともある。障がい父を何もかも変えてしまった。これまで順風満帆であった生活が激変してしまったのだ。当時の僕は、今よりも悲観的であったことからどうして僕の父が・・・とばかり考えていた。しかし母は違った。母は僕に教えてくれた。

「障がいを持った父が一番苦しんでいるのだから、皆で支え合って父の前では、どんなに苦しくとも笑顔でいようね。」と。

僕は大きく考え方が変わった。母は、この障がいを受け入れ前向きに変えていこうとしている。これが障がいを持った方々への真の接し方ではないか。母の一念が僕を奮い立たせた。

それからどんなに僕達が辛くとも本人が一番辛いということを心に置き父と接するようになった。その気持ちが笑顔として伝わったのか父は次第に行動が穏やかになってきた。勿論完全に良くなった訳ではなく、急にささいなことで怒り出したり、落ち込んだり時には何気ないことで笑い出したりする。しかし僕はその父と接していただける時間が幸せであると思えるようになってきた。自分が変われば相手も変わるし当にこの通りだと思う。父にとって障がいのある人生は、これまで出来た事が出来なくなるもどかしさ。また、思うように家族や友人とふれ合うことが出来なくなることへの苛立ち。多くの感情が渦巻き、大変だったねの一言では表せないような複雑な気持ちであったと思う。しかしそんな時こそ僕達ができることは、障がいをプラスの方向で受け入れ、苦しみを少しでも理解しようという気持ちを持ち、笑顔で接すること。このことが大切だと思う。

世界にはこのことに気づいていないまだ多くの障がいを持った方々がいらっしやると思う。僕はそんな方々へ声を大にして訴えたい。

「苦しんでいるのは一人では無いよ。」と。障がい者と健常者。このように差別化している場面は、仕事でも日常生活の中でもよく見かける。確かに行動しにくい所はあると思う。ただ「自分が変われば相手も変わる」ということを意識し行動する考え方を持つことで共生

社会の中で支え合って暮らすことは可能であるし、これから変えていけるとも思う。

僕は、これからも広く周りにこのことを訴えかけ、一人でも多くの障がいを持った方を行動で示し救っていきたいと思った。人間の持つ可能性は無限大である思う。